

ギルギットの梵文法華經

—写本と信奉者たちと工匠たち

オスカル・フォン・ヒニューバー

小槻晴明・水船教義 共訳

古代インド以来、破壊を免れ唯一残っていた経蔵が、1931年にギルギット近郊のナウブルの古い建物の遺跡で偶然に発見された。この遺跡は、最近まで仏塔だと考えられていた。しかし、G・フスマンによる最近の研究は違った方向を示唆している。証拠として残っている考古学上の事実は少ないのであるが、これらに基づき推論した限りでは、この建物は人が住んでいた小さな塔で僧侶の住居であった。古代ガンダーラの彫像に描かれているような寺院に似ている。二層だったと思われるこの小さな建物に住んでいた、一人もしくは複数の僧侶は、宗教上の助言、そしておそらく儀式の執行を行い、この地方の仏教共同体で癒やしを行う療法師であったに違いない。このことは、ナウブル/ギルギットで発見された写本の中の二点の医学書によって確認されている。最近のフスマンの発見は、仏教写本の筆記者、書写生としての僧侶が担った役割を強調したG・ショーペンの論考によって反論されたというより、補強されたというべきであろう¹⁾。この場所は、今はイスラム教徒の共同墓地になっているようである²⁾。

この経蔵に保管されていた、文書の数、あるいはむしろ經典の数というべきか³⁾、また写本の数を確認することは、今となっては不可能である。その理由の一つをあげると、(シャタピタカ・シリーズの)写真版は有益ではあるが、写本が発見された後、ばらばらになって別の場所に動いてしまったフォリオを、同シリーズの写真版を使って、元の場所に戻し、再構成することはできないからである⁴⁾。この作業は、写本の実物を使用することによってのみ可能になる⁵⁾。

従って、57の經典と17のアヴァダーナを内容とする約50の写本があったと推定できるだけである。このアヴァダーナについては、それぞれ個別のテキスト

として保存されていたのか、あるいは、総数不詳のアヴァダーナ・コレクションの一部として保管されていたのかは不明である。ギルギット写本のなかでも、梵文法華経写本は、4つもの写本が経蔵コレクションの中に保存されていたという点で特に異彩を放つ。3つの写本がニューデリーの国立公文書館に所蔵されている。Serial numbers 44, 45, 47a, 48, 49 という番号が付された別々の区分に分かれてしまっている。Serial numbers 50a, 52a, 52d.2 という区分に迷い込んでしまったフォリオもある⁶⁾。

これらのフォリオの多くが、渡辺照宏によって編集出版された。Saddharpunḍarīkasūtra Manuscripts Found at Gilgit. Tokyo Part I (1972), Part 2 (1974), この中の“Group A”は serial no. 45 (FE pages 2813-3052) の120 フォリオからなり, “Group B”は serial no. 44 (FE pages 2785-2812) の14 フォリオと、serial no. 47a (FE pages 3053-3118) の33 フォリオからなる。一方、serial no. 49 (FE pages 3217-3220) の2 (訳注: 1の誤りか?) フォリオと serial no. 52d.2 (FE pages 3311-3312) の2 フォリオは、渡辺本には収録されていない。これらは“Group B”に属し、20章の一部であるフォリオ99と、フォリオ71と72の断片である。これは serial no. 52a (FE page 3306) にも言える。これは渡辺本のフォリオ 102a,b の右の断片である。また“Group B” (FE pages 3496/3495 and 3499/3500) に属するフォリオ65と98の断片の一部が、大量の般若経テキストのフォリオを収めた serial no. 50 の中に紛れ込んでいた。また渡辺照宏の言う“Group C”に属する48フォリオが serial no. 48 (FE pages 3121-3216) に収められている。この部分は戸田宏文によって(ローマ字版が)編集出版された: Saddharpunḍarīkasūtra Gilgit Manuscripts (Groups B and C), in: 徳島大学教養部紀要(人文・社会科学) 14. 1979, p. 249-304, 特に p. 249-300. さらに、この写本の20のフォリオが戸田宏文によって編集出版された: Gilgit Manuscripts (Tucci's Collection) Group C, in: 徳島大学教養部倫理学科紀要 15. 1988. このローマ字版は、ラニエロ・グニョリが出版した本に掲載された、ローマで保存されている写真によったものである。The Gilgit Manuscript of the Saddharpunḍarīkasūtram, in: *Orientalia Iosephi Tucci Memoriae Dicata*. Vol. II. Serie Orientale Roma LVI, 2. Rome 1987, p. 533 and plates I-XX. 7枚のフォリオが大英図書館に所蔵されている。この部分は渡辺本に“Group C”として掲載されている。

4つ目のギルギット写本は30葉、断簡ではあるが大きいものである。現在カ

シミールに保管され(正確な場所は不明)、オスカル・フォン・ヒニューバーによって1982年に出版された。A new fragmentary manuscript of the Saddharmapundarikasūtra. Tokyo 1982⁷⁾。これら断簡のすべての写真版が、この出版本に掲載されている。

この写真版以外に、注4に記したように、梵文法華経ギルギット写本のモノクロ版が入手可能である。1959年から1974年にかけてロケッシュ・チャンドラによってデリーで出版されたものである。さらに、デリーの国立公文書館のマイクロフィルムから複製した画像が、立正大学から出版されたCD-ROM 1セットに収録されていて、梵文法華経写本の電子データが閲覧可能である。この中で、ギルギット写本はCD-ROM Vol. II nos. 9-10の中にあるが、収録されているのは serial numbers 44, 45, 47 だけである。

ほとんどすべての梵文法華経ギルギット写本は樺の樹皮に書かれている。注目すべき例外は、いわゆる「粘土で表面加工した紙」に書かれた写本 no. 48 (グループC) である。R・キショールが、この粘土で加工した紙について解説し、化学的分析を行っている。A Clay-coated manuscript in the Gilgit Collection. The Indian Archives. New Delhi 15. 1963/63, p. 1-3. テキストの全体がこの特種な「紙」に書写された写本は法華経だけであるが、極めて少数の写本、例えば no. 36 Saṃghāṭasūtra 相融経(写本“F”)は、ある部分は樺の樹皮に、ある部分はこの「紙」に書かれている。

ごくまれにギルギット写本の奥書が残っていることがある。幸運な偶然によって、二つの梵文法華経写本の奥書が消失を免れた。このことは非常に興味深く、重要である。それは、奥書に写本の奉納者として記された人たちは、同時に法華経の最初期の信奉者であり、これによって我々はその名前を知ることができるからである。これらの名前は、写本が奉納された後も、この仏教共同体で永く記憶されたことであろう。Śayanāsanavastu of the Mūlasarvāstivādinaya 根本説一切有部律の臥具相分には、次のように述べられている⁸⁾。

uktaṃ ca bhagavatā abhyañītakālagatānāṃ dānapaṭīnāṃ nāmnā dakṣiṇā ādeṣṭavyā itī. saṃghasthavīro 'bhyañītakālagatānāṃ dānapaṭīnāṃ arthāya gāthāṃ bhāṣate

世尊はまた、次のように言われた。「福德は、物故した施主であっても、そ

の名により回向されるべきである」と。教団の長老は、物故した施主のために偈を唱える。

この一節は、寺院の寄進に言及したものであるが、写本など他の寄進も（徳を積む行為として）尊敬されていたので、奉納の際は、寄進者たちの名も読み上げられたことであろうことは想像に難くない。また、この文書の中で明瞭には述べられていないが、物故した寄進者たちの名前を繰り返して読み上げ、彼らへの思いを新たにしている慣習があったようである。このように、法華経を奉納した人々の名が、ギルギット地方で長期間にわたって記憶されたということは、あり得ないことではない。

幸運なことに、少なくとも法華経写本“C”の奥書（のデータ）を我々は確実に入手している。本文の終りの部分からすぐに奥書へ、あるいはうまくすると複数の奥書へと、続いているからである。最初の奥書は法華経の本文に付けられたものであり、二番目の奥書は写本の奉納者たちによって、奉納者たちのために書かれたものである。写本“C”に付された奥書の冒頭部分は、それ以降の写本に書かれる定型文の一行目となった。この伝統に則った写本には法華経を讃える一連の修辭からなる奥書が書かれている。次のような偈である。

*aṃgārakarāṣūṇ gāhivā ākramya kṣurasamstaram.
gantavyam kulaputrena yatra sūtram ida[m] bhavet.*

この経は、良家の息子の赴く所、共に在るべし。
墨の火坑に入るとも、鋭き刃の褥に身をおくとも。

この行が冒頭にくる偈（時に他の偈が付加されることもある）は、ネパールでは11世紀に始まり、ネパール系写本の伝統として19世紀末まで踏襲されていくが、これに続く二行目以下の偈は、ここでは欠落している⁹⁾。

写本“C”の奥書は、早くも1932年に、シルヴァン・レヴィによる最初のギルギット出土文書の出版によって知られるようになった。ここで紹介するテキストは、“Die Palola Śāhis” p. 81f. No. 41B を基にしたものである。若干の修正を加えた¹⁰⁾。

... yatra sūtram ida[m] bhavet \ /1/ devadharme (!) yaṃ mahāsraddhopāsaka
 (1) lerakṣiṇena. (2) tathā sardhaṃ śiri/2/yena. (3) tathā śusūreṇa. (4) tathā mahā-
 śiriyena. (5) tathā chchādīpuruṣe sithusiḥghena. (6) tathā sārddhaṃ putraena. (7)
 tathā vā/3/śāsighena leranihelapatinā. (8) tathā jīvasidhiyena. (9) tathā
 vupharṇena. (10) sidhasighena. /4/ (11) tathā sārddhaṃ mahādharmabhāṇaka
 ācārya bhikṣu krayādhanā kalyāṇatrāt[e]na. (12) tathā sārddhaṃ mahādha-
 rmabhāṇaka bhikṣu dhrarme/5/dramatinā. (13) tathā sārddhaṃ aṣṭauliyena saṃca-
 vamaena. (14) tathā sārddhaṃ bhikṣunā kṣemaena. (15) tathā cikiriṣeṇa. (16) tathā
 sārddhaṃ /6/ burīśukhena. (17) tathā sārddhaṃ sāitāpuruṣe vargasighena. (18) tathā
 mātumena. (18a) jīvakṣiṇeṇa. (19) tathā maṅgalaśiriyena /7/ (20) tathā burī-
 kṣiṇena. (21) tathā sārddhaṃ cvavaśiriyena. (22) tathā kulācīna aparṣikena. (23) ta-
 thā khukhuphanena. (24) tathā pevoṭhi/8/yena. (25) tathā daśiyena. (26) tathā
 śāraśriyena. (27) tathā mulāriyena. (28) tathā utrupharṇena. (29) tathā kararatse-
 na. /9/ (30) tathā kālagatena pitunā cikiriṣeṇa. (31) kālagata vālośenana(!).
 (32) kālagata sagarkaena. (33) kālagata vā/10/sathūlena. (34) kālagata khu-
 khathūlena. (35) kālagata khukhiyena. (36) kālagata pharṇena. (37) kālagata
 cvarmakṣiṇena. /11/ (38) kālagata lerapukhrena. (39) kālagata putreṇaṇa (!)
 śūlaphanana. (40) kālagata mitapharṇena. (41) kālagata khukha/12/ + (ś)ena.
 (42) kālagata si + + + +. (43) (kālagata vālo)siḥghena

これは、以下の篤信の人々による奉納である。(1) この上ない篤信の居士
 Lerakṣiṇa (2) Śiri/2/ と共に (3) 同じく Śusūra (4) 同じく Mahāśiri (5) 同じく
 Chchādīpuruṣe-Sithusiḥgha¹¹⁾ (6) (その?) 息子と共に (7) 同じく Vā/3/śāsigha
 Lera-nihelapati (8) 同じく Jīvasidhi (9) 同じく Vupharṇa (10) Sidhasiḥgha. /4/ (11)
 Mahādharmabhāṇaka Ācārya Bhikṣu Krayādhanā Kalyāṇatrāta と共に (12) Mahā-
 dharmabhāṇaka Bhikṣu Dhrarme/5/dramati と共に (13) Aṣṭauli(ya) Saṃcavama と
 共に (14) Bhikṣu Kṣema と共に (15) 同じく Cikiriṣa (16) /6/ Burīśukha と共に
 (17) Sāitāpuruṣe-Vargasiḥgha と共に (18) 同じく Mātuma (18a) Jīvakṣiṇa (19) 同
 じく Maṅgalaśiri /7/ (20) 同じく Burīkṣiṇa (21) Cvavaśiri と共に (22) 同じく
 Kulācīna Aparṣika (23) 同じく Khukhuphana (24) 同じく Pevoṭhi /8/ (25) 同じく
 Daśi (26) 同じく Śāraśri (27) 同じく Mulāri (28) 同じく Utrupharṇa (29) 同じく

Kararatsa /9/ (30) 同じく故人となった父 Cikiriṣa (31) 故人となった Vālosena (32) 故人となった Sagarka (33) 故人となった Vā/10/sath≈la (34) 故人となった Khukhathūla (35) 故人となった Khukhi (36) 故人となった Pharna (37) 故人となった Cvarmakṣiṇa /11/ (38) 故人となった Lerapukhra (39) 故人となった (その?) 息子 Śūlaphana (40) 故人となった Mitapharna (41) 故人となった Khukha/12/ + (ś)a (42) 故人となった Si + + + + (43) 故人となった Vālosingha

法華経を信奉する在家の人々の一団が現在の我々に、このように直接語りかけてくるのは、インド仏教史において嚆矢となるものである。

彼らの名前については“Die Kolophone der Gilgit-Handschriften¹²⁾”の中でかなり詳しく論じられている。これらの名前は、奉納者たちの集団がかなり国際色豊かであったことを示している。°*pha(r)na* (nos 9, 23, 28, 36, 39, 40) の語尾で終わる名前は、no. 38 *Lera-pukhra* のように、イラン語の影響が見られる。No. 38 *Lera-pukhra* はイラン語、おそらくはバクトリア語かバルティア語の「息子」*pukhra*¹³⁾ を含んでいる。このことは後でまた論じたい。一方、*puruse* (nos. 5, 17) を含む名前は、ギルギット地域のブルシャスキの方言からきていることを示している。*khukha/khukhu* (nos. 34, 35, 41) についても同じである。他にはブルシャスキ=イラン系の名前である no. 23 *Khukhuphana* のような、混淆した名前がある。また、はっきりしないものも多い。

これらは大規模な寄進をした人の名前を多数連ねているだけではない。この仏事に関わった三人の僧侶もここに名を連ねている (nos. 11, 12, 14)。最初の二人 (nos. 11, 12) は、*mahādharmabhāṇaka* (大法師) と呼ばれる高僧たちである。当然のことながら、*Mahādharmabhāṇaka* と *Ācārya* (阿闍梨) の二つの称号を持つ *Krayādhana Kalyāṇatrāta* の名前が先に来ている。*krayādhana* という語、あるいはシルヴァン・レヴィの読みのように *krayādhara* と読むべきかもしれないが、この語 (の本来の形と意味) ははっきりしないが、おそらく一つの称号であろう¹⁴⁾。次の人物は *Mahādharmabhāṇaka Bhikṣu* (大法師比丘) *Dharmedramati* である。彼の名前 *Dharmedramati* は、標準サンスクリットの *Dharmendramati* に対応する。彼の名前の独特な語形はとりわけ興味深い。*dharma* ではなく *dharma* となるのは、北西地域 (アフガニスタン、カシミール地方など) に典型的な言語的特徴、いわゆる「ダルド語群に見られる流音の位置転換」である。このことは、この名

前が土着の僧のものであり、従ってこの仏事がほぼ間違いなく地域行事であったことを裏付けている。

次の名前 no. 13 *Aṣṭauliya Saṃcavama* は不可解な言葉である。名前それ自体が不明瞭である。*Saṃcavama* の名前が、*bhikṣu* (比丘) *Kṣema* より先に書かれているので、*aṣṭauliya* または *aṣṭauli* は、普通の比丘より高位の称号を指すのであろう。

三人の僧の名がサンスクリット語であるのに対し、列挙されたおそらくは44人と思われる人々の中で、サンスクリット語から派生した名前の人はわずか6人と少数 (2, 4, 8, 10, 18a[?], 19) であることは注目に値する。ほとんどの名前の由来が定かでないので、名前や称号・肩書きを示す語の切れ目を確定する方法が必ずしも明確にならない。結果として、奉納者の正確な人数も割り出せないのである。

奥書に記された少なくとも44人のうち (nos. 30-43)、14人が写本奉納のときには、すでに故人となっていたので、その功德は彼らに回向されたのである。物故者の先頭は no. 30 父 *Cikiriṣa* である。存命者の中に *Cikiriṣa* (no. 15) という名のもう一人の人物がいることに注目すべきである。故人となった *Cikiriṣa* が、筆頭奉納者 *Lerakṣiṇa* の父であることは、ほぼ間違いないであろう。*Lerakṣiṇa* は、no. 38 *Lerapukhra* との類似点を考慮すれば、イラン人であったかもしれない¹⁵⁾。さらに、no. 20 *Buri-kṣiṇa* は no. 1 *Lera-kṣiṇa* と、no. 16 *Burī-sukha* は [no. 20] *Buri-kṣiṇa* と、類似点を比較できる。*Lera* が *Lerakṣiṇa* の息子だとすれば、*Mamupukhra* が彼の母にちなんだ名前のように、彼も父の名にちなんで命名されたことになる (下記参照)。

注目すべきは、全員の名前が男性名詞の活用語尾 *-(y)ena* で終わっているの、一見、奉納に参加した女性は一人もいないかのように見える点である。女性 (の名前) が多いギルギット出土のブロンズ像 (の銘) と比較すれば、これはなおいっそう驚くべきことである。しかし、これら定型化した奉納者の名前の男性名詞格語尾は、女性の固有名詞にも用いられることを考慮すれば、このような印象をもつことは事実誤認である。故に、*°siriya* のような名前は当然 *°srī* で終わる名詞の活用形であるが、女性名詞とみなすこともできる (もちろん男性名詞の場合もある)。No. 24 *Pevoṭhī* は間違いなく女性である。No. 25 *Daśi*, no. 26 *Śāraśrī*, no. 27 *Mulāri* および no. 19 *Maṅgalaśrī* もほぼ間違いなく女性であろう。さらに

no. 2 Śiri (Śrī) は, Lerakṣiṇa の次に記されているので、彼(?)の妻かもしれない。また no. 4 Mahāśrī も女性であろう。このように、少なくとも 7 人の女性への言及がなされている。

これらの人々は、ほぼ間違いなくインダス川上流域に住んでいたと考えられるが、-oṭ(h)a- で終わる男性の名前は、インダス川上流域由来の碑文によって十分に確認されている。これらの名前は -oṭ(h)ī- という語尾の女性形を持つ。そうすると、Pevothī という名前は、写本の奉納者がギルギット地域（おそらく広域ギルギット地域）の居住者であったということを示している。

フォリオ番号の無い所属不明の一葉に奥書がある。渡辺照宏は暫定的に写本“A”に関するものとしているが、この奥書が写本“A”のものかどうかは全く定かではない。しかし、サイズは合っているように見える。計画中の新しい写真版のために撮影された良質の写真のおかげで、かつて“Die Palola Śāhis,” no. 40B p. 80 に掲載した奥書のローマ字表記を、多くの部分で改善することができた¹⁶⁾。

/1/ J(s)ya. (1) tathā sārđhaṃ mahāśraddhopāsikā mamuśiriyena. (2) mamupukhryasya. (3) tathā sārđhaṃ vālopharṇasya (4) tathā sārđhaṃ mahāga[m]{ja}pati dīlīka agaco /2/ [... tath]ā sārđhaṃ (5) sadāvidavagātureṇa. (6) tathā sārđhaṃ mahā(ṣṭha) āramatideśapharṇasya. (7) tahā sārđhaṃ khītām-puruṣeṇa gakhrapatinām. (8) tathā sārđhaṃ sa/3/ [...] sarvasatvānām anut(!)a{ra}jñānavāpunāyā bhavati. ||

この写本の欠損のない本来のフォリオを想定すれば、各行の前半 18 字 (akṣaras) が、失われている。その 1 行目は破損がなければ、deyadharmo yaṃ (5 字) で始まり、首席奉納者の名前 (5 字) と tathā sārđhaṃ (3 字) が続き、次に次席奉納者の名前 (5 字) が並んでいたか、あるいは首席奉納者の名前 (5 字) とその称号、すなわち mahāśraddhopāsaka (7 字) となっていたはずである。一見してはっきり分かるのは、1 行目の先端の残存部分が、属格語尾 Jsyā となっていることである。これによれば、後者の可能性が高いのかもしれない。しかしながら、普通は具格を伴う tathā sārđhaṃ という常套句が、この奥書や他の奥書には属格を伴って使用されている。

2 行目と 3 行目もそれぞれ 18 字が欠落している。この部分に何人の奉納者が

記されていたか推測して、この空白を埋めることは不可能である。奉納者たちの名前や称号の長さがまちまちだからである。それでも、少なくとも二人、最大限三人の名前が失われている。それは、*yad atra punyaṃ* のような句が3行目(先端)の *sarvasatvānaṃ* に先行して書かれていたはずだからである。この語は、途中で節穴があるので、*sarvasa* (アキ) *tvānaṃ* と、語の中程に少しアキおいて書かれている。このように考えると、総計約12人の人々が奉納に参加したことになる。その中に no. 2 この上ない篤信の優婆夷 Mamuṣiri と、その母の名が容易に分かる「Mamuの息子」という名前が書かれている。これは注目に値する。と言うのは、古代インドにおいては、母の名はその息子の名にちなんで呼称され、その逆はないからである。よく知られた例として、ブッダの出家前の妻は Rāhulamātā (羅睺羅の母) と呼ばれた。写本“C”の奥書に no. 38 Lera-pukhra という名前がある。彼はおそらく父の名にちなんで名付けられたのであろう。もし no. 1 Lerakṣiṇa の息子であるとすれば、この名前も同様に注目に値する。

また、no. 3 Vālopharna のようなイラン系の名前が書かれている。奥書“C” no. 43 の Vālo-siṅgha と no. 32 Vālo-sena を参照。また、一人のブルシャ人 no. 7 Khītam-puruṣa Gakhrapati の名もあるが、サンスクリットの名は一つもない。彼らの名前、称号の意味するところは不明である。書写生が *anuttarajñāna*^o とすべきところを *anut(!)ajñāna*^o と一字書き忘れたのであれば、no. 4 は *mahāgam[ja]pati* 「大会計官」と読むことも不可能ではない。イラン系の官名 (*mahā gamjapati* は、時折ブロンズ像の銘文に見出される。

以上のように、グループ“A”写本のものと同定される奥書は、グループ“C”写本の奥書から導かれる結論を裏付けている。すなわち、まずブルシャスキの人々の名前が示すように、法華経を信奉していたのはギルギット地域の仏教徒と、おそらく中央アジアから移住したと考えられるイラン系の篤信の人々であったということである。中央アジアとの関係は、その他の資料からも良く知られている。ソグド人の商人たちがシャティアルの磨崖に自分たちの名前を刻んでいることを考慮すれば十分であろう¹⁸⁾。さらに、法華経の多くの断簡や多量のカシュガル(ホータン)写本の存在は、特にホータン地域で、この経典が絶大な支持を受けていた事実を十分に証明して余りあるものである¹⁹⁾。ギルギットとホータンの仏教徒たちが特に一つの経典を重用した例として良く知られている

のは、Samghātasūtra 相融経がある。ギルギットの経蔵の中に、この經典の写本は総計8つあり、法華経と薬師経の写本はそれぞれ4つであったことから、相融経の方が残存資料としては多いことが分かる。こうしたことは、古代のギルギット地域の仏教徒にとって、法華経が格別に重要であったことを示している。法華経の重要性については、ギルギットの経蔵の写本群から得た事実はもちろんのこととして、この地域から出土したその他の仏教碑文などからも実証される。

かなり前になるが、美術史家のプラーン・ゴーパール・ポールは、“Early Sculpture of Kashmir”と題する論考の中で、法華経とギルギット出土のブロンズ像との間の関連性に注目している²⁰⁾。ポールの主張するところによれば、このギルギットのブロンズ像は Palola Śāhi Nandivikramādityanandi は (ラウキカ) 80年ヴァイシャーカ月の白分8日 (=西暦714年4月20日) に寄進したもので、法華経の一節に照らして釈迦牟尼 (の像) であると解釈できる (plate 1)²¹⁾。第10章「法師品」に以下のように書かれている。

tathāgatapāṇiparimāṛjitamūrdhānās ca te (sc. kulaputrā vā kuladuhitaro vā) bhaviṣyanti ya imaṃ dharmaparyāyaṃ tathāgatasya parinirvṛtasya śraddadhiṣyanti vācayiṣyanti likhiṣyanti satkarīṣyanti gurukarīṣyanti pareṣāṃ ca saṃśrāvayiṣyanti, SP (ed. H. Kern 231,3-6)

「如来の滅後、この法 (法華経) を信じ、読誦、書写せしめ、尊び、敬わしめ、人に説く善男善女は、その頭を如来の手で撫でられるであろう」

第26章「普賢菩薩勸発品」のテキストは、法師たち、および普賢菩薩に関連して、さらに明確な表現で法華経に言及する。

Śākyamuninā ca tathāgatena teṣāṃ mūrdhni pāṇiḥ pratiṣṭhāpito bhaviṣyati, SP (ed. H. Kern 480,5 foll.)

「(普賢菩薩を尊び、法華経を聴聞する) 者たちは、釈迦如来によって、その頭に手が置かれるだろう」

ナンディヴィクラマーディティヤナンディ王のためにブロンズ像を製作した工匠(たち)そして、施主である王自身も当然、法華経のこの一節からヒントを得たであろうことは、全くあり得ない話ではない。もし、そうだとすれば、釈迦牟尼仏陀と考えられるこの像が持つ経典は、このテキストの一写本かも知れない²²⁾。しかし、留意すべきは、パローラ・シャーヒについてのブロンズ像図像学の研究は、理解されてはいるが、現段階でも十分になされてはいない。いずれにせよ、仏像の右手の形が通常と大きく異なっているのは、ギルギットの経蔵にあった4つの法華経写本から得られた靈感によるものである、という想定は、奉納者が釈迦如来のイメージを抱いていたかどうかは別として、頭から否定することはできない。

数年前にホドゥルという所で発見された図像を検証してみると、我々はさらに安全な立脚点にいるということが分かる(plate 2)²³⁾。仏塔の両脇に二体の仏像が座しているのが見える。これはもちろん、法華経の第11章「宝塔品」の釈迦牟尼仏と多宝仏を表したものである。この章の文中で、釈迦牟尼仏が妙なる力で開いた仏塔に、多宝仏が半座を分かち招き入れた、と述べられているが、それを塔の中の二仏並座で表現するのが、中国美術では通例である。この有名なエピソードの具象化は、中国では一般的なものであるが、インドでは全く見られない。従って、ホドゥルの磨崖図の重要性は無視することができないものである。

この図像はおそらく、他の碑文から良く知られている一人の旅行者によって、あるいはその旅行者のために描かれたものであろう。もっとも、二つの(仏塔の)図の間にある願文が、どちらの仏塔に対するものかがはっきりしない²⁴⁾。

/line 1/ devaddharmo yaṃ /2/ amṛtendrā[laṃkā]rasya

「これは敬虔な Amṛtendrālaṃkāra の奉納である」

名前が部分的に破損してはいるが、確信をもって解読することができる。なぜなら、珍しい名前であり、一度ならず同じ筆跡で記されているからである。Amṛtendrālaṃkāra という名前の入った碑文が、他の旅行者のものより多く見られるので、Amṛtendrālaṃkāra の足跡をたどることができる。それは、インダス

川上流を約50キロ、シン・ナラからギチ・ナラとホドゥルを経由し、トールに至る道である。

インダス川上流に足跡を残した旅人たちの中に、三人の法師 (*dharmabhāṅakas* 教を語る者) がいる。彼らの名前はオシバトという所の二つの碑文に見出すことができる²⁵⁾。彼らが自らを旅行者であると、強調しているのは興味深い。

I. /line 1/ vicarati dharmavāṅaka śūra /2/ carmavidakama+ /3/ vicarati dharmabhāṅaka pāla (11:4)

II. vicarati guṇasena dharmabhāṅa[ka] (15:9)

I. 「法師シューラは遍歴する。チャルマヴィダカマ(??)。法師パーラは遍歴する」

II. 「グナセーナ法師は遍歴する」

以上のことは、法華経写本“A”の奥書にある、二人の法師が奉納に参加したということと一致する。また、ナレンドラダッタという別の法師が、ギルギットの経蔵に保存されていた「アジタセーナの授記」*Ajitasenavyākaraṇa* の写本を書写している。

結論として、少なくとも5人の人物の存在がある。そのうちの二人はカルヤーナトラータとダルメンドラマティで、両者とも法華経の奥書に言及がある。彼らは出家者であり、法師 (*dharmabhāṅaka*) という立場である。法師と法華経の関連が偶然でないことは確かである。この経典が法を広める人たちを讃えているのは第10章「法師品」に限ったことではない。このように法華経は、仏教地域のギルギットを出て、カラコルム山中の遠く離れた地域で必ずしも好意的でない困難な状況で生活し、法を説いている法師たちに元気を与える経典であったと見ることもできる。いわゆる「大乘涅槃経」(*Mahāyāna-Mahāparinirvāṇasūtra* もしくは *Mahāparinirvāṇamahāsūtra*) の作者は、次の文章を書いた時、同じような心の状態であったかも知れない。以下は下田正弘の著書に添えられた英文の要約からの引用である²⁶⁾。

「法師たち (*dharmakathikas* or *dharmabhāṅakas*) は、アーチャーリヤ (*acārya*) を

守るために、在家信徒が五戒を受けず、武装することを認める。彼らは、チャンダーラを含む在家信徒に伴われ、危険な地域を歩き、山々を越える」

これはほとんどインダス河流域の旅の記述になっていて、碑文と文献の記述がいかにお互いの説明になっているかを証明している。

法師たちはまた神秘的な加護を求めていたことが、別のギルギット写本から分かる。「宝星陀羅尼経」(*Ratnaketuparivarta*)²⁷⁾には特別な陀羅尼が説かれている。これは法師たちを、あらゆる種類の病から守るだけでなく、とりわけ宿世の悪業による四大不調 (*dhātusaṃkṣobha*) をも防いでくれる特別な陀羅尼である。四大不調は仏の教えを正しく読誦出来なくする「声の不調」(*svarasaṃkṣobha*) の原因となるものである。もちろん法師は仏典に頻繁に登場する²⁸⁾。その例をも一つだけギルギット写本から引用する。

*bhagavān āha. dharmabhāṇakaḥ sarvasūra tathāgatasamo jñātavyaḥ. sarvasūra āha. katamo dharmabhāṇakaḥ. bhagavān āha. yaḥ saṃghāṭaṃ sūtraṃ śrāvayati sa dharmabhāṇakaḥ, Saṃghāṭasūtra § 45*²⁹⁾

「世尊は言われた。『サルヴァスーラよ、法師 (*dharmabhāṇaka*) を如来のごとく敬うべきである』と。サルヴァスーラは言った。『いかなる法師ですか?』と。世尊は言われた。『相融経 (*Saṃghāṭasūtra*) を読誦する者である』と」

このように、法師に言及のあるすべての経典は、当然のことながら、まさにその経典の読誦者を讃えている。それでも、一つの章の全体を法師への言及に当てている法華経の奥書に二人の法師の名前の記述があり、この地域 (インダス河流域) の碑文にさらに三人の法師の名前が登場するという事実は、なお注目し値する。

ギルギット法華経写本に関する上記の考察は、この経典が6世紀末から8世紀初頭にかけて、パローラ・シャーヒ (Palola Śāhi) 王朝治世下のギルギットの仏教文化の中にしっかりと根付いていたことを示している。経典の伝承は、法華経の写本を書写する営みによって洗練されていった。奥書の内容から得られる結論として、これらの写本は礼拝時に用いられたと言える。さらに、西暦714

年、伝統的にブッダの誕生と成道と涅槃の日とされた、ヴィシャーカ月の満月の日に行われるヴィシャーカの供養 (Viśākhapūjā) という重要な日の数日前に、パローラ・シャーヒ・ナンディヴィクラマーディティヤナンディ (Palola Śāhi Nandivikramādityanandi) は、奉納するブロンズ像の非凡な形を思いついたが、その発想の源泉となったのが法華経だということは、ほぼ間違いないであろう。

最後に、法を広めた仏教僧である二人の法師たちは多様な民族的背景をもつ在家信徒の大集団の利益と功德のために、当時あった法華経写本の一つを書写させたのである。これは法華経がギルギットの範囲をこえて、様々な民族の人々に広く信奉されていたことを示している。

結論して言えば、ギルギットの経蔵から回収された法華経写本は、最初の、完全ではないにしても、梵文法華経の大部分を伝承したテキストであるという意義を有するだけでない。仏教と古代ギルギットの仏教文化が流布した多くの地域において、法華経の存在を感じさせるということでもある。このことは、古代インドの写本から見出された他のいかなる事実よりも、法華経の直接的な影響について物語っている。

注

* 訳者注：和訳は () 内に表記し最低限にとどめ、典拠資料については訳さず原文のままにした。

- 1) Gérard Fussman: Dans quel type de bâtiment furent trouvés les manuscrits de Gilgit? (どのような建物からギルギット写本群は発見されたか?) *Journal Asiatique* 292. 2004, p. 101-150; Gregory Schopen: On the absence of Urtext and Otiose Ācāryas: Books, Buildings, and Lay Buddhist Ritual at Gilgit (原初テキストの不在と何もしない Ācāryas について: ギルギットにおける文書、建物および在家仏教徒の儀式), in: Gérard Colas et Gerdi Gerschheimer (Édd.): *Écrire et transmettre en Inde classique*. (École française d'Extrême-Orient. Études thématiques 23) Paris 2009 [rev.: Jean-Pierre Filliozat, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres. *Comptes rendus des séances de l'année 2009* [2011], p. 1754-1760; L. Rocher, *Journal of the American Oriental Society* 131. 2011, p. 133-135; O. v. Hinüber, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* (in press)], p. 189-219. For more details see also (詳しくは以下も参照) O. v. Hinüber: *The Gilgit Manuscripts. An Ancient Buddhist Library in Modern Research: Introduction* (in press) (ギルギット写本群. 近代研究における古代仏教の一経蔵).

序論(印刷中)。— Images from Gandhāra showing the type of a building as reconstructed by G. Fussman can be seen (ガンダーラ由来の彫像がG. Fussmanの再構成によって、一つの建物の類型を示している。以下の文献にあり) in Isao Kurita: Gandharan Art. Vol. I. Tokyo²2003, p. 260f. and in Giuseppe de Marco: The *stūpa* as a funerary monument. New iconographic evidence. East and West New Series 37. 1987, p. 191-246, particularly p. 203 fig. 6 with p. 202 note 23: The image reproduced by de Marco was seen in the market at Karachi in 1974. The present whereabouts of the piece seem to be unknown. (de Marcoによって印刷刊行された像は1974年カラチの市場で目撃された。それが今どこにあるかは不明のようである。)

- 2) Images showing the site at the time of the discovery of the Gilgit manuscripts can be found (ギルギット写本群が発見されたときの現場の写真は以下の文献にあり) in Willy Baruch: Beiträge zum Saddharmapuṇḍarikasūtra. Leiden 1938, II. Beilage, 3 plates.
- 3) Some texts are embedded in other texts, such as the Nāgakumāra-avadāna in the Pravrajyāvastu of the Vinayavastu. (いくつかのテキストは他のテキストの中に紛れ込んでいる。たとえば律事・出家事の中にNāgakumāra-avadānaが紛れ込んでいる場合など。)
- 4) Lokesh Chandra: Gilgit Buddhist Manuscripts (Facsimile Edition). Śāta-Piṭaka Series Vol. 10, 1-10. Delhi 1959-1974 (abbreviated here as “FE” (本稿では“FE”と略す), reprinted in three parts as (リプリント版が3分冊で発刊): Gilgit Buddhist Manuscripts, revised and enlarged compact facsimile edition. Bibliotheca Indo-Buddhica Series 150, 151, 152. Delhi 1995.
- 5) The new facsimile edition planned by the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University giving for the first time the measurements of each folio, could also be very helpful for reassembling the manuscripts in their original form. (創価大学国際仏教学高等研究所が新たな写真版の出版を準備中であるが、初めての試みとして各フォリオの寸法が示してある。これによって、写本をもとの形に整理し直すことが可能になるであろう。)
- 6) The numbers refer to The Gilgit Manuscripts, as note 1, where the numbers introduced by the National Archives and used in the Facsimile Edition (FE) are kept, but partly split up into sub-numbers, where ever this seemed useful and appropriate. This — hopefully — helps to avoid confusion, although the original numbering is neither adequate nor very practical. ([拙稿] The Gilgit Manuscriptsの注1で述べたが、同稿で用いた写本の番号は国立公文書館が付し、[Śāta-Piṭaka Seriesの] Facsimile Edition (FE) で使用されたものをそのまま踏襲した。しかし、適切かつ有益と思われる場合は、部分に分け、下位番号(sub-numbers)を付した。これによって、もとの番号の付け方が不適切で使用不能の場合であっても、混乱を避けることはできると思う。)

- 7) This book was reviewed by (同書に対する書評は下記のとおり) H. Bechert: *Journal of Religious Studies* (Patiala) 11. 1983, p. 118-120; G. Fussman, *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* 73. 1984, p. 384 foll.; H. - O. Feistel, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 134. 1984, p. 387; P. Williams, *Journal of the Royal Asiatic Society* 1984, p. 156 foll.; D. Seyfort-Ruegg, *Journal of the American Oriental Society* 106. 1986, p. 879; H. Eimer, *Orientalistische Literaturzeitung* 81. 1986, columns 393foll.
- 8) The Gilgit Manuscript of the Śayanāsanavastu and the Adhikaraṇavastu edited by Raniero Gnoli. Serie Orientale Roma L. Rom 1978, p. 36.8-8.
- 9) For details cf. (詳しくは以下を参照) O. v. Hinüber: Aus der Welt der Kolophone von Gilgit bis Lān² Nā (to appear in "On Colophons" [Conference organized by the research group "Manuscript Cultures in Asia and Africa" in Hamburg from 3rd to 5th December 2009]).
- 10) O. v. Hinüber: Die Palola Ṣāhis. Ihre Steininschriften, Inschriften auf Bronzen, Handschriftenkolophone und Schutzzauber. (Antiquities of Northern Pakistan 5). Mainz 2004 [rev.: Adam Nayyar, *Journal of Asian Studies* 65. 2006, p. 453 foll.; R. Salomon, *Bulletin of the Asia Institute* 17. 2003, p. 183-185; Harry Falk, *Orientalistische Literaturzeitung* 100. 2005, columns 696-698; Gérard Fussman, *Journal Asiatique* 293. 2005, p. 734-742; R. Schmitt, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 157. 2007, p. 500-502; Alberto M. Caccopardo, *East and West New Series* 58. 2008, p. 475-477] with supplements: Three New Bronzes from Gilgit. *Annual Report of the International Research Institute of Advanced Buddhism* (at Soka University) 10. 2007, p. 39-43; More Gilgit Bronzes and Some Additions to "Die Palola Ṣāhis." *ibidem* 12. 2009, p. 3-6; An Inscribed Incense Burner from the MacLean Collection in Chicago, *ibidem* 13. 2010, p. 3-88 and Four Donations Made by Maṅgalaḥṃsīkā, Queen of Palola (Gilgit), *ibidem* 14. 2011, p. 3-6.
- 11) In spite of the fact that the scribe wrote °*siḡha* throughout there can be little doubt that °*siṅgha* is meant, which occurs very frequently elsewhere in names in inscriptions along the Upper Indus. (書写生は一貫して °*siḡha* と書いているが、ほとんど疑いもなく °*siṅgha* の意味である。このような [脱字の] 現象はインダス川上流域にある碑文の人名表記にきわめて高い頻度で見られる。)
- 12) O. v. Hinüber: Die Kolophone der Gilgit-Handschriften. StII 5/6. 1980, 49-83 = Kleine Schriften. Wiesbaden 2009, p. 688-721, particularly p. 66-69 on IX Saddharmapūṇḍarīkasūtra, cf. also the index to this article under the individual names.
- 13) For Parthian *pwhr*, cf. (パルティア語 *pwhr* については下記を参照) Rüdiger Schmitt: Die mittelpersischen Sprachen im Überblick, in: Rüdiger Schmitt (Ed): *Compendium Linguarum Iranicarum*. Wiesbaden 1989, p. 99, and for Bactrian *poora* or *poura*, i.e.

puhra, cf. Ivan Michajlovitch Steblin-Kamenskij: Baktriskij jazyk, in: Vera Sergeevna Rastorgueva (Ed.): Osnovy iranskogo jazykoznanija. Sredneiranskije jazyki. Moscow 1981, p. 338. — The reading *pukhrena* follows Sylvain Lévi, who recognized the Iranian word *pukhra*, which was most likely not be represented by *hra* in Indian script, because Indian *h* is voiced in contrast to the voiceless *h* in Parthian (*pukhrena* という読みは Sylvain Lévi に従った。彼はこのイラン語の単語を *pukhra* であるとみなした。*pukhra* をインドの書体の *hra* を用いて表記する可能性があるようには思えない。その理由は、パルティア語の *h* が無声音であるのに対して、インド語 *h* は有声音であるからである。) : Werner Sundermann: Parthisch, in: Compendium, as above, p. 122. The rare *akṣara* interpreted as *khra* does not normally occur in Indian languages. (*khra* であると解釈される、このまれなる *akṣara* はインド諸語には通常は見られない。)

- 14) Perhaps it might be assumed, if the reading *krayādhara* is correct, that *krayādhara* either stands for **kryādhara* = *kriyādhara* (for *r* : *ra* cf. *prhr̥ṣto* : *prahr̥ṣto*, Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden Teil IV. Wiesbaden 1980, p. 237, K 466, b Blatt 12 R 2), or it is a writing mistake for **kriyādhara*. However, **kriyādhara* “practitioner (??)” or “decision maker (??)” is not attested otherwise. (おそらく次のように考えられるであろう。もし *krayādhara* という読みが正しいのであれば、*krayādhara* は **kryādhara* = *kriyādhara* を表すか (その理由 : *r* : *ra* cf. *prhr̥ṣto* : *prahr̥ṣto*, Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden Teil IV. Wiesbaden 1980, p. 237, K 466, b Blatt 12 R 2) あるいは **kriyādhara* の誤写であろう。しかし、**kriyādhara* が“信仰実践者 (??)”または“意思決定者 (??)” という意味をもっていることを証明するものは他にない。)
- 15) In no. 7 *lera-nihela-pati* seems to be a title rather than a name; on Khotanese *nihela-pati* cf. (no. 7 の *lera-nihela-pati* は名前であるというより、称号であろう。ホータン語 *nihela-pati* については、次を参照のこと) Ronald Eric Emmerick: Two Indian loanwords in Khotanese., in: Studien zum Jainismus und Buddhismus. Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf. Alt- und Neu-Indische Studien 23. Wiesbaden 1981, pp. 79-82, particularly p. 81, where the meanwhile outdated reading *nihela-mati* is repeated. (特に p. 81 の、すでに使われなくなった読みである *nihela-mati* が繰り返されているところ。)
- 16) I am obliged to Prof. Dr. Seishi Karashima and Dr. Noriyuki Kudo for granting access to these as yet unpublished materials. (未発表の資料を見せてくださった辛嶋静志教授と工藤順之博士に深く感謝申し上げます。)
- 17) Cf. Die Palola Śāhis, as above note 10, p. 141 with note 181. (上記註10に既出の Die Palola Śāhis, p. 141 note 181 を参照のこと。)
- 18) Ditte König, Gérard Fussman (Edd.): Die Felsbildstation Shatial. Materialien zur Archäologie von Nord-Pakistan 2. Mainz 1997.
- 19) In contrast to the Saṃghātasūtra, which was translated into Khotanese Saka, there is only

- a single line of the text of the Saddharmapuṇḍarikasūtra preserved in Khotanese translation in the Book of Zambasta VI 3 and a brief metrical summary of the Saddharmapuṇḍarikasūtra in Khotanese, cf. (ホータン・サカ語に翻訳された Saṃghātasūtra とは対照的に、ホータン語訳「ザンバスタの書」VI 3 の中に Saddharmapuṇḍarikasūtra のテキストが一行保存されているのと、ホータン語の Saddharmapuṇḍarikasūtra の短い韻文形式の要約があるのみである。以下参照のこと) Mauro Maggi: Khotanese Literature, in: The Literature of Pre-Islamic Iran. Companion Volume I to A History of Persian Literature ed. by Ronald Eric Emmerick and Maria Macuch. A History of Persian Literature Volume XVII. London 2009, p. 375.
- 20) This thesis was printed in Enschede (Holland) in 1986 as a “Proefschrift” (thesis), see p. 204-209. (この論考は“Proefschrift” (thesis) として1986年にエンスヘーデ (オランダ) で出版された。p. 204-209を見よ。)
- 21) The inscription on this bronze is edited and discussed in “Die Palola Śāhis,” as note 10, no. 14, p. 38 foll. (このブロンズ像の碑文は“Die Palola Śāhis,” as note 10, no. 14, p. 38 foll. において編集され、論じられている。)
- 22) There are also quite different and contradictory interpretations of this bronze, (このブロンズ像にはまったく異なる、相対立する解釈が存在する) first as the Palola Śāhi “as an initiate under the guidance of the great master Mañjuśrī” “exploiting Sudhana’s model” (??) (まず「偉大な師マンジュシュリーの指導の下で」「Sudhanaを手本して」「秘伝を授けられたものとしての」パーローラ・シャーヒー) by Anna Filigenzi: (Anna Filigenziによる。以下はその典拠) The Dāna, the Pātra and the Cakravartin-ship: Archaeological and Art Historical Evidence for a Social History of Early Medieval Buddhism, in: Claudine Bautze-Picron (Ed.): Miscellanies about the Buddha Image. South Asian Archaeology 2007. Special Sessions 1. BAR International Series 1888. Oxford 2008, p. 11-24, particularly p. 21, and again very recently without referring to neither p. G. Paul nor to A. Filigenzi by Rebecca L. Twist (そして P. G. Paul にも A. Filigenzi にも言及せずに Rebecca L. Twist によるもの。以下はその典拠): The Patola Shahi Dynasty. A Buddhological Study of their Patronage, Devotion and Politics. Saarbrücken 2011, p. 146 foll. with figure A.1, who tries — very wisely hesitatingly — to establish this image as a representation of Vairocana / Mañjuśrī (whatever that is), without, however, even mentioning the gesture of the right hand of the Buddha or being able to interpret the image as a whole limiting herself to erratic and mostly extremely vague connections of iconographical details to representations of both, Vairocana and Mañjuśrī, which is rather unhelpful. (figure A. 1 において、同氏は一きわめて賢明に躊躇しつつも—この像が Vairocana / Mañjuśrī (それがどちらであれ) を現したものであるとして、その証明を試みている。しかしながら、この仏像の右手の形に言及することすらしていないし、像の全体としての説明ができておらず、

Vairocana と Mañjuśrī の両方を現しているという、一貫性のない、きわめて漠然とした関係について、図像学的観点から詳細な説明をしているだけである。この説明は役にたつものではない。) Moreover, attention should be paid to the simple fact that the name Vairocana is conspicuous by absence among the (quite a few) names of Buddhas found in the inscriptions along the Uper Indus. (さらに言えば、インダス川上流域の碑文に見出される(きわめてわずかの)仏の名前の中に、Vairocana という名称が存在しないということだけははっきりしている。この単純な事実についてのみ留意すべきである。)

- 23) The drawing was published in the catalogue (この岩絵は以下のカタログに掲載されている) “Gandhāra. Das buddhistische Erbe Pakistans. Legenden, Klöster und Paradiese. 21. November 2008 bis 15. März 2009 in der Kunst- und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland in Bonn”, p. 353, cf. 357a. I am obliged to Prof. Dr. Harald Hauptmann, Heidelberger Akademie der Wissenschaften, for the permission to publish this image. (この画像の掲載を許可して下さいハイデルベルク・アカデミーの Prof. Dr. Harald Hauptmann に深く感謝申し上げます。)
- 24) Above this inscription there are some clumsily written *akṣaras* probably signifying nothing. There seem to be two characters below the *devaddharma* line *dhi +* of uncertain meaning. — By the side of the second *stūpa* there is one line in small *akṣaras* reading *sārdham yaśa(bhaḍa)sya* “together with Yaśa[]” and in large characters *candrasenasya* “of Candrasena” and again below this name *candrasenavihāre*. The last three characters are clearly readable once the image is enlarged. — The wording “together with Yaśa[]” seems to indicate that Yaśa[] might be the donor or participated in the donation of the smaller *stūpa*, which is most likely later than the Prabhūtaratna scene given the way in which the available space on the rock is used. The relation of the name Candrasena to the *stūpas* is as obscure as the meaning of “in the Candrasena Monastery.” Perhaps Candrasena was a traveller who visited the site and wrote down his name after the two *stūpas* were drawn. (この碑文の上方にぎこちない書体で、おそらく無意味の、複数の文字が書いてある。*devaddharma* で始まる行の下に *dhi +* という意味が不明確な二つの文字のようなものが見える。—第二の「仏塔」の側に小さな文字で一行 *sārdham yaśa(bhaḍa)sya* 「ヤシャ [] とともに」と書いてあり、また大きな文字で *candrasenasya* 「チャンドラセーナの」とあり、再度その下にこの名前があり、*candrasenavihāre* (チャンドラセーナ僧院において) とある。—「ヤシャ [] とともに」という表現は、ヤシャ [] は、小さい方の「仏塔」の施主か、この「仏塔」の献納(作画)に参加したであろうということを示唆しており、岩の上の使用可能なスペースに書かれているところを考慮すれば、(左の)多宝の場面より後に書かれた可能性が高い。チャンドラセーナという名前とこれらの「仏塔」との関係は、「チャンドラセーナ僧院において」という表現と同様、

はっきりしない。)

- 25) Martin Bemann und Ditte König (Edd.): Die Felsbildstation Oshibat. Materialien zur Archäologie von Nord-Pakistan I. Mainz 1994.
- 26) Masahiro Shimoda: A Study of the Mahāparinirvāṇasūtra with a Focus on Methodology of the Study of Mahāyānasūtras. Tokyo 1997, p. 15. The Mahāparinirvāṇamahāsūtra actually uses the word *dharmakathika*, (Mahāparinirvāṇamahāsūtra は *dharmakathika* という語を使っている。下記を参照) cf. Seishi Karashima and Klaus Wille: The British Library Sanskrit Fragments. Buddhist Manuscripts from Central Asia. Vol. II.1 Texts, Tokyo 2009, p. 554: [*bha*]yārditānāṃ *dharmakathi*<*kathi*>*kānām dharmanaitrī*[...] / line 2/ ...] *kāntare vā aṭavikāntāre vā nadīkāntāre*
- 27) *dharmabhāṇakarakṣāyai*, Ratnaketuparivarta ed. by Yenshu Kurumiya. Kyoto 1978, p. 137.2* “for the protection of *dharmabhāṇakas* (法師の守護のために).”
- 28) On *dharmabhāṇakas* see (*dharmabhāṇakas* については以下を参照) Graeme MacQueen: Inspired Speech in Early Mahāyāna Buddhism II. Religion 12. 1982, p. 49-65, particularly p. 53 foll.; Keisho Tsukamoto: Source Elements of the Lotus Sūtra, Buddhist Integration of Religion, Thought, and Culture. Tokyo 2007, p. 179 foll. for references also from inscriptions (さらなる碑文からの言及については); Richard Nance: The *dharmabhāṇaka* inside and outside the *sūtras*. Religion Compass 2. 2008, p. 134-159 is not accessible to me (筆者は p. 134-159 を見る事ができなかった). In later texts such as the Nepalese version of the *Kāraṇḍavyūha*, the *dharmabhāṇaka* is also seen as a tantric yogī, (*Kāraṇḍavyūha* のネパール本などの後代のテキストにおいては、タントラ行者としての *dharmabhāṇaka* が登場する。下記を参照) cf. Adelheid Mette, Indo-Iranian Journal 47. 2004, p. 325 note 11; for evidence from Khotan cf. O. v. Hinüber, Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft 157. 2007, p. 390 note 14.
- 29) Giotto Canevascini: The Khotanese Saṅghāṭasūtra. A critical edition. Beiträge zur Iranistik Band 14. Wiesbaden 1993.

Plates



plate 1



plate 1-a



plate 1-b



plate 2

(Oskar von Hinüber / フライブルク大学名誉教授)
(訳・こつき はるあき / 東洋哲学研究所委嘱研究員
みずふね のりよし / 東洋哲学研究所委嘱研究員)